



高校生ウルルン滞在記

筑紫女学園高等学校1年

ラフマン シャハナさん

私のお弁当には年に2~3度インディカ米が入ることがある。「そのお米って、シャハナの国の?」「食べてみたい!」「いいよ。味どう?」「おいしい」。こういった具合で友達には大好評だ。いつだったか、日本で米がとれずタイ米を大量に輸入したと聞いたことがある。そのときは不評だったらしいが、どちらも食べてきた私にはジャポニカ米もインディカ米もおいしい。

GDP世界第2位の日本は競争ランキングが世界第24位。なぜそうなっているのか父に聞いてみた。父が言うには日本は自国を保護しているからだ。自国を保護? 農林水産省が発表した、先進国の中で最低と言われる日本の40%という自給率はスーパーに行けばうかがえる。並べられているものは中国産やインドネシア産が多い。それにも関わらず自国を保護しているとはどういうことなのか。そこで私は米の関税について調べてみた。

JETRO(日本貿易振興機構)によると1kgの米にかけられる税金は341円。20kg買うとすれば6820円。税金だけでこんなにかかるのだ。新潟県魚沼産コシヒカリを2袋買ったほうがはるかに安いだろう。このため、日本には輸入米が少ない。けれども私の頭にはもう一つ考えがあった。

それは日本の文化だ。世界で陸続きの隣国がない国はめずらしい。日本もその一つだ。そのせいか、民族も特有で江戸時代の鎖国のときにはさらに独特な民族になっていただろう。ハーフやクォーターなど

異民族の文化を持つ子どもも少ない。そんな日本で育ち、そういう友達に囲まれている私は時々思うことがある。

日本人は見えていない世界が多いということだ。最近外国人も増え、相手の国に対して興味もひかれるようになっただろう。休みになれば多くの人が海外に行く。けれども、それは決まった国ばかりではないだろうか。オセアニアならオーストラリアやハワイ、ヨーロッパならフランス・イタリア。アジアならバリ島やソウル。そしてアメリカ。わざわざアフリカの紛争地帯に行く人は少ないだろう。アフリカといえば学校に行けない子どもがたくさんいるというイメージだがそれはテレビからくるものだ。アフリカにもおいしい食べ物や美しいものがたくさんあるはずだ。けれどテレビにも限界がある。こんな経験はないだろうか。テレビで見ているも行った気分にはならない。そこに行ったことのある人、本人の口から話を聞くと自分も行ったように感じる。また、パリのルーブル美術館に行って芸術品を鑑賞しても田舎に行っていなければ、それはフランスの表面しか見えていないことになる。私も何十カ国も行ったわけではないが、貧困問題は肌身で感じてきた。人に「お金を恵んで」と手を伸ばす子ども達、彼らの目を見ると居ても立ってもいられなくなる。

そこで私は提案する。名づけて、『高校生ウルルン滞在記』。高校生活3年間のどこかで必ず、すべての生徒が世界のいろんな地域に期間を決めて行く。

TBSのあの番組のようにたった一人で未知の世界に足を踏み入れる。容易なことではないが、そこでの経験は決して無駄にはならないだろう。また、そこで感じたものを自分の国に持ち帰ればきっとそれは日本を、いや世界をさらに発展させていくだろう。必ずしもという自信はないけれど、私にそのような経験ができるならば、一回り成長して帰ってくると思う。

個人個人でする必要はない。「高校生全員を海外に行かせるなんて無理だよ」と思っているあなた、国は何のためにあるのですか？ 国会とはどういうときに使うのですか？ 国全体で考えれば良いのです。

高校生を海外に行かせる団体はたくさんあるけれど国全体で政策をとるとどうなるだろうか。少しずつ、でも一歩ずつ広がっていくだろう。多くの国がこの政策をマネすると私は思う。日本には日本のいいところがある。私の母国であるバングラデシュも知って欲しいところがたくさんある。良いところをすべての国で分け合って、悪いところはみんなで解決していく。どっかの国で問題が起きればみんなで考える。今の時代、一つの国で秘密にすることはできない。だからこそすべての人を同じ市民と思える時代にしていきたい。

平和って何だろう？ それは心で願うものなのだろうか。私にはすべての人がみんなのことを考えられるようになったときこそ平和は実現するものだと思う。